片恋デイズ

水姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
片恋デイズ

【Ｎコード】
Ｎ１０８７Ｂ

【作者名】
水姫

【あらすじ】
見てるだけで幸せ。話したいとか、付き合いたいとかじゃない。ただ、君の隣にいれる事が、嬉しかった…。

授業中に見せる、無邪気な寝顔が好き。

気だるそうに、雨を見つめる横顔が好き。

時々、照れた様にはにかむ笑顔が好き。

君の隣の席は、私の特等席なんです。

●片恋デイズ●

隣の君を、チラリと横目で見る。これはもう、日課となってた。

彼は授業中だというのに、人目も気にせず眠っている。これは当たり前の事になっているので、クラスの誰ひとり、彼を起こそうとしない。というより、彼の眠りの深さは異常なので、起こしたって無駄だと知ってるんだ。

（…可愛い。）

すやすやと寝息をたてる君。無垢な表情は、男の子相手に使うのは失礼だけど、そう思わずにはいられなかった。

彼の名前は、高橋　翔。キレイな顔した男の子。頭脳明晰、運動神経抜群、容姿淡麗と校内じゃ、ちょっとした有名人。

ねぇ、翔くん。知ってますか？君の隣の席をを何人の娘が、欲しがったか。たか。今だって、たくさんの女の子が頬染めて、君の寝顔をチラチラと、見ているんだよ。

そんな君を、こんな近くで見れる私は、幸せ者だね。

窓から入る爽やかな風は、彼の茶金の髪を優しく揺らす。腕を枕にする君は、風を感じたのか、『ん…』と小さな声をもらした。

それと同時に、頬が熱くなってゆくのが、自分でよくわかった。

（なんか、恥ずかしい…。）

私の隣にいる時は、彼は大抵寝てるか、窓の外を眺めてる。まぁ、だから見つめる事ができるんだけど…（見てるのバレないから）。

……翔くん、君の瞳に、私は一度でも映った事がありますか？

君は知ってる？もう私と君が隣になって、1ヶ月近くたつという事を。いつ席替えしたって、おかしくないという事を。

――結局私は、昨日も今日も、明日も明後日も見つめる事しかできないんです。

――――――――――――――――――――

「オイこら、新しい席わかったら早く席着けー。」

そんな担任の声のもと、みんなは騒ぎながら、自分の席へと向かう。

喜びに舞う人や、落胆する人。おもしろい程、笑い声が教室内に響く。

そんな中私は、まるで静かだった。だって正直私は、どこの席だろうと、誰の隣だろうと興味なかった。胸にあるのは、もう君の隣にはいられないという、哀しい事実だけ。

「仕方ない…よね。」

自嘲気味に呟く。まるで心は空っぽ。静かに自分の新しい席へと向かう。

（ここかぁ。前の席と、あまり変わってない様な……）

「あっ！」

「えっ？」

「…ぁ」

突然の声に驚き、横を見れば――

「…翔くん」

―また、隣の席。

―信じられない事実に、私は放心状態になってしまい、ただ呆然と立ちつくした。きっとバカみたいに、ぽかん、と口を開けているに違いない。

「座らないの？」

「え？あ、うん！座るよ！」

正気に戻り、ガタガタと大きな音を出しながら、席に着く。

（ま、まともに目が合ったの初めて…！）

恥ずかしさに、体がほてる。何も言えなくて、ギュッと手で制服の裾を強く握った。

（なんか、なんか言わなきゃ）

私が黙りこんでると、彼が不意に呟いた。

「良かった…、また隣の席で」

「えっ！？」

つい、大声を出してしまった。私の声に、みんなが振りかえる。痛い、視線。どうして自分はこう、マヌケなんだろう。申し訳なさでいっぱいになる。

「…ぁ。ご、ごめん」

「いいよ、謝らなくて」

クスクスと、控え目に彼は笑う。持ち前のかっこよさに惚れてる力も加わって、耳まで赤くなってる気がする。

「俺、嬉しいな。これでまた、しばらくは俺の事見てくれるでしょ？」

「……え？」

（それって…）

「気付いてたよ。授業中、隣から視線感じてたから」

その瞬間、顔に火がついた様に、ボッ！と熱くなった。

（バレてた…！）

恥ずかしさで、うつ向いてしまう。

（どうしよう）
（どうしよう）
（どうしよう）

体がこわばる。君の顔を見れない。罪悪感とか、後悔とか、羞恥心とか、いろんなものが心に押し寄せる。

「っ…ふ……ぅう」

泣きたいわけじゃないのに、勝手に涙が集まってきた。困らせたく、ないのに。泣き虫な私、嫌い。

「えっ？ちょ、ご、ごめん。傷つける様な事言っちゃった？」

私の涙に動揺する彼。
そうじゃ、ないのに。

「ごめ、さない…。ごめんさない…！」

出てくる言葉は、謝罪ばかりで。泣きじゃくる自分が、哀れに思えた。

「…謝ってばかりだね。」
「えっ……」

彼は、右手を私の頬に近づけ、指で目尻の涙を掬った。

「君が謝るなら、僕も謝らなきゃ」

「どう、して？」

問いかけると、彼は優しく微笑んで
「だって僕も、寝たふりしながら、君をいつも見てたから」
確かにそう言った。
「…って、えぇ！？なんでまた泣くの！？」
「ち、違っ…！」
止まった涙が、またあふれてく。止めなきゃ、って思ってるのに。
「う～ん、困ったなぁ」
「ごめん、さない」
「……また謝った」
（え？）
それは、一瞬のこと。彼の手が、頬を包んで、見る事は叶わないと思ってた瞳が、間近にあって
コツン、
と、額が触れた。
「あ、泣き止んだ？」

もちろん私は、林檎みたいに真っ赤になった。恥ずかしさや、嬉しさや、いろいろなものが混ざって、切ない様な幸せな様な気持ち。

「…こんなところ見られたら、女の子に殺されそう」

「物騒だね。大丈夫、その時はちゃんと守ってあげるから」

そう言って、彼は私の額に、ちゅっ、と触れるだけの優しいキスをした。

「死刑確実かも……」

「ネガティブだなぁ」

悪戯に笑う君。なんだか悔しくて、私は仕返しとばかりに彼の頬に軽くキスをした。

「仕返し」

彼は、いつものポーカーフェイスを壊して、お互い真っ赤になった。

「そんな仕返しなら、いつでも大歓迎だな」

「え？」

「――また1ヶ月、よろしく。できれば、それ以上もよろしくしたいんだけど…ね」

屈託のない笑顔。初めて、正面から見た。

翔くん、知ってる？私今、涙が出そうな程、嬉しいんだよ。

どうやら、思った以上に早く、片想いの日々とさよならできそうです。

やっぱり君の隣は私の特等席

（後書き）

席替えってドキドキしますよね。特に好きな人が隣になると、ずっとこのままがいいって…。今回は、そんな女の子の気持ちを書いてみました。感想等くれると嬉しいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1087b/

片恋デイズ

2010年10月21日22時25分発行